広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	米言語学会、言語学講座等に出席して
Author(s)	橋内, 武
Citation	ニダバ , 3 : 87 - 97
Issue Date	1974-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044718
Right	
Relation	

報　　告

米国言語学会言語学講座等に出席して

橋内　武

1. はじめに
2. 米国言語学会言語学講座
3. 第9回人類学民族学国際会議
4. 米国言語学界の動向（まとめ）

1973年夏2カ月半、筆者は私学研修福祉会在外研修員として滞米した。これは、その報告である。

第1の研修先は、Ann ArborのThe University of Michiganであって、そこで8週間LSA Linguistic Institute（米国言語学会言語学講座：7月5日〜8月28日）に通った。筆者は既に1度American Council of Learned Societiesからgrantを得てLinguistic Institutesに出たことがある（1969年夏、Urbana-ChampaignのThe Universtity of Illinois）ので、Linguistic Institutesは今度で2度目である。今度はLSAのfellowship（Ford Foundation）を得て、3科目（G.Lakoff, Grammar, Meaning, Context; R.Lakoff, Language and Society; Staff, Explorations of Language in Context）履修することができた。

第2の研修先は、Chicago。Conrad Hilton Hotelを主会場にして開かれたThe Ninth International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences（第9回人類学民族学国際会議：8月28日〜9月8日）に出席した[1]。

Ann Arborでの言語学講座とChicagoでの国際会議に出たわけだが、前者で学んだものの方がはるかに多く、より有意義であった。そこで、この報告では前者を主、後者を従として扱い、最後に米国言語学界の動向をまとめることにする。

---

1) 前回の人類学民族学国際会議は、1968年9月に我国（東京・京都）で開かれたが、筆者も出席し、拙い発表"Semantic Analysis of 'Iki': Shuzo Kuki's Contribution to Ethnolinguistics"を行った。

2　米国言語学会言語学講座[2]

１９７３年の Linguistic Institute に主導的役割を発揮したのは、Willian Labov であった。彼は associate director として企画立案を進め、中心テーマ "Language in the context of Time, Space and Society" の下に、多彩な教授陣を Ann Arbor に集めた。Labov の他

音韻論の William Wang

生成意味論の George Lakoff と Robin Lakoff

ロンドン学派の Michael Halliday

史的言語学の Paul Kiparsky

と大物が並ぶ。時間の軸を通して考えるのは、史的言語学に留まらない。発達心理言語学も含まれよう。この分野の専門家としては、Lois Bloom らが現われた。

そして、社会言語学の特殊講義がずらりと並んでいる。

C.-J. Bailey : Language Planning and Standardization[3]

Bickerton: Pidgins and Creoles[3]

Ferguson and Fodale: Non-standard English[3]

Ferguson : Language and Religious Experience

Halliday : Sociolinguistic Study of Early Language Development

G. Sankoff: The Structure of Diversity in New Guinea *Tok Pisin*[3]

---

2) LSA の１９７３ Linguistic Institute のレポートは、既に村田勇三郎氏（「アメリカ言語学界の動き」『英語青年』１９７３年１２月号）と本名信行氏（「最近のアメリカ言語学界の動向」『英語教育』１９７４年１月号）が書いているから、合せて参照されたい。

3) これらの科目では Dell Hymes (ed.) *Pidginization and Creolization of Languages*. Cambridge University Press, 1971. がよく読まれていた。また、International Conference on Pidgins and Creoles, Honolulu, July 13-18, 1975 が計画されているという。混合語への新たな関心が高まっているようである。

談話分析には、言語学者（Hallidayら）だけでなく、社会学者（Sacks や Schegloff）も加わった。隣接科学の方から招かれた学者には、外国語学習の社会心理学を開拓してきた Lambert もいたし、確率論の D.Sankoff もいた。

世界各地にちらばっている個別言語や言語群の教授・学習も熱心に行われていた。古英語・ゴート語・ペルシャ語・サンスクリット・セム語・アラブ語諸方言・タイ語・中国語・東南アジアの言語群・新世界のスペイン語・古代ギリシャ語・ラテン語・近代ドイツ語・近代英語等 —— 実に壮観な言語のパノラマである。

こういう具合で、我々は、言語というものが時間・空間・社会の上にどのような姿をとって現われるか —— その多様性、変異性を見せつけられたし、生きた言語研究の大海に放り出された次第である。

上記のコースとは別に毎回講師の変わる 400 Lecture Series : Explorations of Language in context や Forum Lectures があった。講師と演題を列挙しておこう。

Explorations of Language in Context

Michael Halliday, "Language and Social Man: A Socio-Semiotic Approach to Meaning and Text"

William Wang, "Phonology in Context"

Robin Lakoff, "The Social Context of Language Use"

Wallace Lambert, "Language Attitudes in a French American Community"

George Lakoff, "Current Directions in Syntax and Semantics"

Paul Kiparsky, "On the Linguistic Basis of Literary Form"

Emanuel Schegloff,"Current Work in the Sequential Analysis of Conversation, I"

Derek Bickerton, "The Chimera of Context"

James Matisoff, "Language Contact and Genetic Relationship in South East Asia"

William Labov and Rafiqul Isam, "The Role of Linguistics in the Liberation of Bangladesh"

Gillian Sankoff, "The Distribution of Syntactic Machinery"

Harvey Sacks, "Current Work in the Sequential Analysis of Conversation, II"

Lois Bloom, "The Argument for Structure in Child Language"

Charles Ferguson, "The Simplified Registers: Their Structure and Use"

Forum Lectures

Walt Wolfram, "Black and White Speech Relations in the Deep South: How Gray?"

Charles Fillmore, "A Pragmatic Classification of Texts"

Thoman Kochman, "Some Cultural Sources of Communication Failure"

John Gumperz, "On the Sociological Presupposition of Doing Sociolinguistics"

William Labov, "When Does Language Change One Word at a Time?"

William Woods, "Linguistics and Computer Systems that 'Understand'"

Barbara Hall Partee, "Montague Semantics for Derived Verb Phrases"

Mervyn Allenyne, "Synchronic vs. Diachronic Rules in the Interpretation of Afro-American Dialects"

Harry Whitaker, "The Foreign Dialect Syndrome:A Rare Sequel to Brain Damage"

William Stokoe, "Sign Syntax and Human Language Capacity"

H. Sinclair-de Swart, "Relations between Syntactic and Lexical in Child Language"

Susan Ervin-Tripp, "Beyond the Child's First Syntax"

Charles Ferguson, "Universality of Nasality"

上記の諸講演とは別に、西洋古典学科主催の連続講演（古代ギリシャ語やラテン語に関するもの）が企画されたし、また、婦人教育協会は Robin Lakoff を招いて特別講演会〃Why Women Are Ladies?〃を開いた。さらには、Bag Lunch Talk と称して、昼食事に学生の研究発表会が開かれるといった具合で、実に盛り沢山のプログラムであった。

さて、講師陣の話に戻ろう。Labov, G.Lakoff, Hallidayと並べると三者三様で、背景を全く異にする学者が集まったように聞えよう。しかし、言語学イコール社会言語学であるという主張は三者に共通している点であって、このことは、H.Parret(ed), *Discussing Language*, Mouton, 1974. を読めば明らかであろう。

何といっても、学生（という若き信者）を引きつけていたのは Labov であって、彼の講義 Recent Advances in Secular Linguistics には熱心な学生が詰めかけていた。調査と実験に基づいて、より言語事実に肉迫した言語学を打ち立てようとする姿には、post-Chomskian linguistics の祖たる資格を充分に感じさせた。ところで、彼のいう〃secular linguistics〃とは何か。〃scholarstic linguistics〃（従来からある〃象牙の塔の言語学〃）と対象させて表にまとめると次のようになる。

		Scholastic	Secular
Data	1	intuition	observationand experiment
	2	qualitative	quantitative
	3	idiolectal	interpersonal
	4	literary	vernacular
	5	isolated	contextual
Theory	6	categorical	variability
	7	set theory	analysis and probability
	8	formal	substantive
	9	deductive	inferential
	10	change is instantaneaus	change is a progress

Labovは目下精力的に仕事を進めているが、調査と実験を伴うため共同研究の方式をとることが多い。母音変化の計量的研究 *A Quantitative Study of Sound Change in Progress*. 2 volumes. U.S.Regional Survey, Philadelphia, 1972. は、Malcah Yaeger と Richard Steinerとの共著である。また、LSA の1973 Summer Meeting での報告 "Spatial Networks as a site for the Study of Language and thought" は、Charlotte Linde との共同研究である。なお、彼の業績の主なものは、次の2冊の書物に含まれている。

Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular. University of Pennsylvania Press, Philadelphia. 1972.

Sociolinguistics Patterns. University of Pennsylvania Press, Philadelphia. 1972.

次に Robin Lakoff について書いておきたい。彼女は "Language and Society" という講義の中で、語用論（pragmatics）の視点が文法研究に必須である、と力説した。ここでは、彼女のいう The Rules of Politeness を紹介しよう。これには3つの規則

1. Don't impose
2. Give options
3. Make A feel good-be friendly

があり、いずれかに反すると、無礼で傲慢な言い方になってしまう。例えば、

1a. Dinner is served.

1b. Do eat.

のうち、1aの方はこの規則1にかなっているが、1bは規則違反である。

2a. Will you open the window?

2b. Open the window.

の2文を比べた場合、2aは規則2に当てはまるが、2bはこの規則に反する。規則3は自明なことであるから、説明を省く。

R. Lakoff は、language and sex roles や jokes にも触れ、話し手と聞き手の関係が文法にどう作用するかを説明した[4]。

紙面の関係で、筆者の聴いた講義の紹介はこれまでとする。ただひとこと、授業風景で気付いたことをひとつ述べることにする。日本から来た者が驚くのは、講義の初めであれ途中であれ、次から次へと質問や意見が飛び出すことである。中には講義というよりも討論という形で授業が進んでいくものもある。

質問や意見が聴き手の側から活発に出てくる点では、講義も講演も研究発表も変らない。こういう光景は、どうやら日本の大学や学会ではまれなようだ。

Linguistic Institute の期間中に下記の3学会が、Ann Arbor で大会を開いた。

8月1日・2日　Association for Computational Linguistics

8月2日　American Dialect Society, Midwest Region

8月3日－5日　Linguistic Society of America

LSA Summer Meeting は、上記の3日間開かれたが、毎日9時から5時まで、全部で118に及ぶ研究発表が4室に分れてなされた。分科会のトピックは、

---

4) 詳しくは、R. Lakoff の次の論文を読んで理解されたい。
"The Logic of Politeness" *CLS* 9, 1973.
"Language and Women's Place." *Language in Society* 2-1, 1973.

Phonology
Natural Phonology
English Phonology
Generative Historical Phonology
Phonological Theory
Morphology
Syntax I, II, III
Semantics I, II
Syntax and Semantics
Discourse Analysis
Performatives and Speech Acts
Psycholinguistics
Sociolinguistics I, II, III
Historical Linguistics
Indo-European
American-English Dialects
Method and Theory
History of Linguistics and Metatheory

と並び、言語研究に対する間口の広さとこういった多様な研究を支える言語学人口の層の厚さを見せつけられた感があった。

8週間にわたる Ann Arbor での研修は、圧巻であった。顧みるに、どの講義も一貫して variability（変異性）の追究に力が入っていたし、中心テーマ "Language in the context of Time, Space and Society" の理念をよく具現していたように思う。筆者の志す社会言語学が学界の中心に踊り出てきたのは、実に愉快なことであった。

3　第9回人類学民族学国際会議

筆者の研修先は、8月末に Ann Arbor から Chicago に移った。第9回人類学民族学国際会議に出るためである。Conrad Hilton Hotel を貸し切り、4,000人もの参加者を集めての大国際会議であった。テーマ One Species, Many Cultures は、melting

pot の神話が崩れた合衆国の新しい標語ではないかと思われた。

総会や分科会を開くだけでなく、他に、民族誌の役割を果す映画を上映したり、アメリカ民謡の音楽会を開いたり、オペラ〝Tam-Tam〟（G.C.Menotti 作曲）を初演したり、民族博物館見学会を企画したり、さらには、シカゴ市内のエスニック・コミニティーを訪問するという日もあって変化に富んだプログラムであった。

マンモス学会の運営はむずかしい。肝心の分科会は、関係者の努力にもかかわらず失点が多かった。そのうち3つだけ挙げると、

(1) 4,000人を越す多数の参加者が来ることが予めわかりながら、同時にたった4室の文科会しか用意できなかったこと。

(2) プレプリンツを前もって参加者に郵送するはずが、キチンとなされなかったし、予め申し込んでおいたはずのプレプリンツ（発表論文のコピー）が国際会議の受付で手に入らないものが数多くあったこと。

(3) 発表者は口頭発表を許されず、パネラーがその文科会に関係する諸論文を講評するという形式をとった。そのため、提出された発表論文と一般出席者との距離が著しく遠くなってしまったことである。

言語研究者の集まる分科会は、

A Organization of Behavior in Face to Face Interaction（9月3日）

B Language and Man（9月4日）

C Language Evolution（9月5日）

の3つであった[5]。パネラーには、M.A.K.Halliday, J.B.Pride, T.A.Sebeok等の顔ぶれが並んだ。

3つの分科会を通して会場に流れていた空気は、今までの言語学（ないしは言語研究）に対する痛烈な批判であり、狭義の言語学への不満足の表明であった。

(1) 伝統文法は、書きことばに専念したために、話しことばを軽視した。

(2) 構造言語学（とりわけ、米国のそれ）は、話しことばを学の対象に引き上げたが、形式（音韻や形態）の研究に偏したきらいがある。

(3) 生成文法（標準理論）は、言語能力の解明を究極の研究目標としたため、言語運用の研究が軽視されたし、コミニケーションの場が無視された。

---

5) 提出された個人発表論文の数々は、分科会毎にまとめられ、Sol Tax (ed.) *World Anthrobology*. The Hague : Mouton, forthcoming. を飾る予定である。

上のように狭義の言語学をひとつひとつ批判していくと、結局、言語学は人間の全コミニケーション体系を明らかにする学（に中心的役割を果すもの）に脱皮しなければならなくなる。しかし、言語学徒が、同時に心理学者や社会学者になり得るだろうか。狭義の言語学に対する不満はそれなりにわかるとしても、研究対象をこのように拡げていった場合、「それでも言語学だ」とうなずかせるものは、一体何だろうか。筆者は、方法論にそれを求めたいが、今、そこに独自性を認められようか。問題が残る。

この国際会議の報告を Halliday の発言で閉じよう。〃Recently, linguists, I believe belatedly discovered that people talk to each other。〃 ―― 〃People talk〃の視点から〃People talk to each other〃の視点へと今や移行してきていることを、学界の動向として注目したい。

4　米国言語学会の動向（まとめ）

最後に、米国言語学界の動向を簡単にまとめておこう[6]。学界動向といっても筆者のバイアスを含んでいることを承知されたい。

(1) 言語共同体というものは均一性を保っているわけでなく、常に異質多様な成員から成り立っている、とみる傾向にある[7]。

(2) 言語の常態を静的なものとみなすよりは、むしろ常に変化の過程にある動的なものであると考える傾向が強い[8]。

(3) 60年代には言語理論の定式化が高度に進んだが、今やその反動として個別の言語事実を記述することが改めて強調されている[9]。

(4) 文法性の判断の基準として使われてきた言語学者やインフォーマントの直観が疑われるようになってきた[10]。

(5) 言語能力（competence）よりも言語運用（performance）の方を解明しようとする研究が増えてきている[11]。

(6) 文法範疇は、文とか名詞とか否定とかいう風にはっきりと区切られたものではなく、文性や名

---

6) C.T.Bailey, 〃Trying to Talk in the New Paradigm.〃 *Papers in Linguistic* 4-2, 1971. が役に立った。

7) 既に掲げた W.Labov, *Sociolinguistic Patterns* の第8章 〃The Study of Language in Its Social Context〃 を参照のこと。

8) 前掲書 *Sociolinguistic Patterns* の第9章 〃The Social Setting of Linguistic Change〃 を参照のこと。

詞性や否定性の尺度の上で捉えられるべきである。squishes とか hierarchies という用語が使われてきているが、これらは英国学派のいう cline にほぼ一致する[12]。

(7) 言語学の各分野の仕切りが判然としなくなってきた。形態論と統語論、統語論と意味論、意味論と語用論、語用論と社会言語学 —— これらは互いにその領域を重複させている所がある。

(8) 隣接科学との交渉が著しい。例えば、Labovのいう変数規則(variable rules)を理解するには確率論の知識が必要であるし、R。Lakoff の語用論は Grice (哲学者)と Goffmann(社会学者)から説明の具を借りてきていることに気付かねばなるまい。

(9) 言語学者は己の社会的責任を問われるようになり、さまざまな実践的課題を背負い込むようになった。マイノリテー(黒人、アメリカインディアン、シカノ等)の言語教育、聾唖者の教育、失語症と言語治療、言語調査と言語改革、言語上の性差と婦人開放運動、言語研究振興のための対外援助(とくに、独立間もないバングラデッシュへ)等。

以上の9点を<米国言語学界の動向>として指摘し、この在外研修報告を終えることにする。

(ノートルダム清心女子大学　1974年1月26日)

---

9) G.Lakoff, "Interview with Herman Parret" to appear in H.parret, *Discussing Language*, Mouton. を参照のこと。

10) *Sociolinguistic Patterns* の第8章 "The Study of Language in Its Social Context" を参照のこと。

11) 既に掲げた G.Lakoff, "Interview with Herman Parret" を参照のこと。

12) J.Ross, "A Fake NP Squish", in C.-J.Bailey and R.Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*. Georgetown University Press, 1974.